

「フム」

「如何したんや」

「何んや知らんが、肩へさして疣が出来たんで氣持が悪うて弱つてるね」

「ア、そうか、そらいかな、疣が如何した」

「ちぎると跡へ出来、またちぎると跡へ出来るのや」

「フウ、薬でも服んでるのんか」

「別に何處が悪いと云ふ譯でもないの別で薬も服んで

エへんね、只氣味が悪い依つてに寝てるのや」

「併し養生をせんといかんで、氣を付けや、さよなら」

「大きに能う尋ねて來れた、また來てや」

肩の疣は追々大きくなる、そうこうして居る内に瘡は人の顔ほどになりました、目鼻が出来て、此瘡がそろ／＼物を云ふ様になりました。

「コリヤ喜六」

「ア、吃驚した、あんた何や」

遊びにも伴れて行け」

「モシ、冗談云ひなはんな、其の様な事が出来まつかいな」

「それをせねば俺は暴れるぞ」

「コレハ困つたなア」

喜六は肩の辨慶が無理を云ふので困つてます、飯でも食はさぬといふと、己れの手でおのれが食はれぬ様になつて、引奪つて辨慶が食ふて仕舞ひます、日に三升四升と飯を食ひ、酒といへば二升三升飲まにや置かぬと云ふ、實にその日の活計にも差支へるやうな事になつて困つて居ります。

「オイ喜イヤん、如何うや、少とは工合が宜いか」

「イヤ困つた事が出来てきた」

「どうしたんや」

「マア私の肩を見てんか」

「なんや、エ……ツ……、こら如何した」

「俺は、西塔の傍に住んで居た武藏坊辨慶といふものぢや」

「へエー、して其の辨慶さんが何で私の肩へさして出店をこしらへなはつたんや」

「貴様はこの春、大津の岡屋半左衛門と云ふ宿屋へ泊つた事が有るぢやろう」

「へエ違ひおまへん、泊つた事がおます、それが如何しました」

「その時に貴様は壁土を食ふたであらう」

「へエ壁土を食ひましたが、それが如何しましたのだす」

「彼の壁の中へ吃の又平といふ畫師が、俺の姿をば心を籠めて描いた其の畫を彼の壁の中へ塗り込んで仕舞ふた、何うかして今一ト度世に顯れて源氏の御世に、さんと思ふ折柄、昔様が其の壁土を食ふたに依つて、汝の肩へさして俺が顯れて出て、今日から貴様の身體を俺が借るから、サアこれから酒も飲むし飯も食ふし

「マア聞いて、此の春、伊勢參りをして大津の岡屋半左衛門で泊つたんや、其時私が壁土を食ふたら、その壁土の中に吃の又平と云ふ人が心を籠めて辨慶を描いたが、それが壁の中に塗り込んであつたんを、私が知らずに食ふたんや、ところが其の辨慶は源氏の世に翻さんと云ふので、私の肩へ出店をこしらへて私の身體は此間から辨慶になつてるのやと、酒は二三升も飲みよるし、飯は三升も四升も食ひ依るので、實に困つてるのんや、酒や肴を當てがわんと、頭打付をさすね、私は頭が痛ふて往生してる、なんぞ宜い工夫はあるまいか」

「そりや困つた事が出来たなア、宜い事が有る、斯うしたら如何や、これを瘡と云ふてお頼みしたら役に立たぬが、京都の寺町に蛸薬師といふのが有る、彼れは澤からお上りになつたお薬師さんで、澤薬師といふが、何時の程からやら蛸薬師、蛸薬師と云ふ様になつた、